三島由紀夫と昭和二十四年の京都

――世界文学社との関わり（三島由紀夫年譜考）――

田中裕也

一、問題の所在

三島由紀夫と京都の関わりと言えば小説「金閣寺」（「新潮」昭三一・一～一〇）が有名なように、京都がたびたび小説の舞台として選ばれていることは周知のことであり、その関わりは深い。しかし昭和二十年代前半の三島文学と京都の関わりとなると、舞台として選ばれることもあるのだが不明瞭な部分も多い。たとえば『盗賊』（昭二三・一一・二〇、真光社）「親切な機械」（「風雪」3－10、昭二四・一一）などで京都の町並みや風景が描かれながらも、三島自身がいつ京都に訪れたのかという時期の判断だけでなく、実際に訪れたかどうかまで分かっていないこともある。これは昭和二十年代前半の三島の行動自体があまり分かっていないということも問題の一つとしてある。例えばそれ以前の時期である三島の十代の頃の旅行は、比較的情報が残っている。三島の十代の旅行を含む距離のある移動では、その多くが学校の関係者や家族と共に行動しており、家族や知人の証言だけでなく宿泊先の領収書なども実際に残っている。それらは三島家から山中湖文学の森・三島由紀夫文学館に移管された資料からも伺われる。[1] また昭和二十年代も後半になってくると、三島の書簡だけでなく、三島が小説執筆のために滞在した先々での人々の証言なども残っていることが多い。三島が『仮面の告白』（昭二四・七・五、河出書房）を発表し世間から注目されはじめるのが昭和二十四年の年末以降であることから、そうした作家

の知名度の変化が資料の残存に影響していると考えられなくもない。[2] このように昭和二十年代前半の三島の行動に関しては分かっていない部分が多い。戦前の「文藝文化」での創作活動と昭和二十年代後半以降の文壇での華々しい活躍との間の時期にミッシングリンクと言えば大げさだが、少なからずその生活のみならず創作活動に関わる謎が多いことは否めまい。

こうした時期の空白を埋めるためには新資料の発見が最も重要なことは否定しないが、従来の資料を再検討することでも、三島の行動が明らかになる部分や年譜に修正を加えることが可能であろう。

本稿では三島由紀夫と戦後の京都で雑誌「世界文学」「劇作」「世界の子供」を発行していた世界文学社との関わりを跡づけていくことで、昭和二十年代前半の三島の創作活動の一端を少しでも明らかにしたい。

二、三島由紀夫と世界文学社

三島由紀夫と昭和二十年代の京都との関わりで気にかかる記述がある。『決定版三島由紀夫全集』第四十二巻（平一七・八・三〇、新潮社）には、佐藤秀明、山中剛史、井上隆史の三氏が作成した非常に丁寧な三島由紀夫の「年譜」が収録されている。三島由紀夫研究を行う上で、三島の行動を調べる際に必ず参考にすべき資料である。この「年譜」の昭和二十三年の記述には、

三月下旬　京都の世界文学社の招きで講演に行き、一週間ほど滞在する。世界文学社の「吉村」と新人作家の梅田晴夫とともに東京駅でつばめに乗車、柊屋に宿泊。竜安寺、西芳寺を見学、都おどりを見る。

とある。この出来事の記述にはいくつかの疑問点があるが、まずはこの記述が何に基づいて書かれたものであるのかを紹介したい。この記述は新潮社から出版された旧版の三島由紀夫の全集『三島由紀夫全集』第二十巻（昭五〇・二・二五、新潮社）の「付録」に書かれた、梅田晴夫「紅茶の《はしご》」の記事に基づいている。梅田晴夫といえば現在では、ラジオ・テレビの脚本家であったり、宝石やパイプ、時計などの趣味に関する書物を上梓した人物としての方が有名であろうが、当時は慶応大学大学院の修士課程を出て、主にフランス文学の翻訳や小説を執筆していた。梅田は三島と知り合ったきっかけを次のように記している。

私が三島由紀夫を識ったきっかけは、戦後すぐ京都で新鮮な出版活動をはじめていた世界文学社で《仮面の告白》を構想中だった、ということはそのめざましい天才をようやく認められはじめていた当時の、三島由紀夫を京都に招いて講演をさせるという計画があり、丁度そのころ二冊ほどフランス戯曲の翻訳を同社で出していた私をさしみのつまにしてやろうということになって、そのころ編輯責任者であった吉村さん（のちにラジオ九州）と三島由紀夫と私とが、東京駅発《つばめ》の座席で落ち合うことになったことにはじまっている。

このように三島と梅田は世界文学社の招きに応じて入洛したことが分かる。この梅田の発言には謙遜も混じっていようが、三島との京都での体験は梅田にとって忘れられないものだったらしい。果たして三島が梅田を見知っていたかは分からないが、梅田の方は三島のことを既に知っていたらしい。

私はそのときの、三島由紀夫との一週間の京都滞在のことを、恐らく一生涯片時も忘れることはあるまいと思われる。（略）私は昭和二十一年当時師匠の川端康成の関係で鎌倉文庫で出していた《ヨーロッパ》という雑誌の手伝いをしていたので、三島由紀夫が《煙草》とか《春子》とかいう作品を風呂敷に包んで編集部に届けてくる姿を、本当に《仰ぎみる》思いで見ていたが、面とむかって口をきいたのは、あの《つばめ》での同席が最初であった。

梅田も三島と同じく川端に師事していたようである。三島の短編小説「煙草」（昭二一・六）「春子」（昭二二・一二）はともに川端が経営に関与していた鎌倉文庫から発行の雑誌「人間」に掲載された作品であり、梅田はそのことを覚えていたようだ。[3] また三島と世界文学社との関わりは川端を介したものであったようだ。当時「世界文学」で編集を担当していた金関寿夫が「川端康成の紹介」であったことを証言している。[4] ここで世界文学社について簡単に紹介しておきたい。

柴野方彦は東京帝大の心理学科を出て戦中は文藝春秋社の編集におり、世界各国の文学を翻訳・紹介する雑誌として「世界文学」を昭和二十一年三月に創刊する。昭和二十五年三月に廃刊するまで三十八号を数えた。[5] また柴野は織田作之助と三高時代に同級生であったことから、織田作之

助も「夫婦善哉後日（第二回）」（昭二一・六）「ジュリアン・ソレル」（昭二一・一〇）「可能性の文学」（吉村正一郎との対談、昭二二・一）を発表している。「世界文学」は世界各国の文学を翻訳・紹介するとは言え、その多くはフランスの作家の作品であった。それは当時京都大学文学部仏文科の教授であった伊吹武彦が編集長であったことも要因として考えられよう。「世界文学」は毎月およそ五万部を発行していたが、サルトル「水入らず」（※翻訳は伊吹武彦）を昭和二十一年十月の第六号に翻訳した際には八万部を印刷したが即日で売り切れ、さらに十万部増刷することになったという[6]。このように当時の京都において好調な出版で勢いのあった世界文学社は、若手の有望株の一人として三島に作品を書かせていたのだろう。三島は「世界文学」に「ドルヂェル伯の舞踏会」（昭二三・五）「小説の技巧について」（昭二四・三）「プチ・プロポ」（昭二四・六）を発表している。作品数は三作でいずれも頁数も多くないものだったが、世界文学社は作品発表だけでなく、作家としての立場を確立していない時期の三島に作家として講演会をも開いてくれる格好の場であったのである。

三、「年譜」に対する疑問

さて前章では世界文学社と三島由紀夫の関係性を見てきたが、再び「年譜」と梅田晴夫「紅茶の《はしご》」の記事に戻りたい。先ほども述べたように「年譜」の世界文学社に関する箇所には疑問がある。それは「年譜」の日付の問題である。「年譜」は三島の入洛を昭和二十三年「三月下旬」のこととしているが、それも梅田の文章に依っている。梅田の文章をみていきたい。まず梅田の記事の内容は世界文学社での講演については殆ど書かれておらず、むしろ五歳年下でほぼ同年代の三島とどのように京都で過ごしたのかということと、その体験が梅田自身の小説執筆に活かされたことが記されている。梅田は三島との京都でのできごとは「昭和二十三年当時」のことであると述べ、次のように記している。

ある晩門限のきびしい柊屋の夜にうんざりした二人は、下足番の目をかすめて靴を部屋までもって来て、庭から外に出て京都特有の背の低い築地塀をのりこえて市中に出た。そして新京極に出てショート・ケーキ

と紅茶の《はしご》をやったのである。二人とも酒がのめないころだったと同時に、まだ二人とも《甘味》に飢えていた、戦後の青年だったのである。三月末にしては生温かい風の吹く夜の町を戻ってきた私たちは、さっき難なく飛びこえた築地塀の下が堀になっていて、逆にこちらからは絶対にのりこえられないようになっているのを知って愕然とした。

三島も梅田も二十代の青年であり、旅館の門限が早すぎることに部屋で大人しくしていられなかったのであろう。また旅館の築地塀が外からは乗り越えられず正面玄関の番頭に入れてくれと頼むが、番頭に「《蘭の間のお客はんならもう帰られてます。》」と入館を断られてしまう話は笑いを誘う。世界文学社の社長である柴野の取り計らいによって二人は事なきを得たようだが、梅田は「昭和二十三年」「三月末」の青春のできごととして回想している。しかしその記事には「昭和二十三年」「三月末」の時期とそぐわない内容も記されている。

梅田は「三島君と私は京都の柊屋に泊ったが、別室では《花の素顔》を執筆中の舟橋聖一さんが、むっつりとむくんだような顔をして机にむかっている姿がのぞかれたりした。」と記している。舟橋聖一の「花の素顔」が「朝日新聞」に連載されていた時期は昭和二十四年一月一日から六月二十四日であり、八ヶ月も前から執筆を進めていたと考えれば時期としては問題はないが、なぜ「むっつりむくんだような顔」をしてまで書いていたのか。内容について熟考していたとも考えられなくはないが、普通に考えれば旅館で籠もって執筆していたのだとすれば、それは締め切りに慌てていたからではないのか。そうすると梅田の回想の時期に錯誤があるのではないかという考えがおこる。また「《仮面の告白》構想中だった」と梅田は述べている。確かに、昭和二十一、二年頃から自伝的な小説を書くことを三島は計画していた。[7] しかし三島が自伝的な書き下ろし長編小説のタイトル『仮面の告白』（昭二四・七・五、河出書房）を題名として決定したのは、昭和二十三年十一月頃だと考えられている。[8] 梅田がこの文章を書いたのは三島との出会いから既に二十年以上も後であり、記憶に曖昧な点が目立つ。この「仮面の告白」についての梅田の発言から二つのことが考えられる。①梅田の三島への記憶の内容自体に間違いがある。②梅田の記憶には時期の間違いがある。この二つであるが、本稿では主に②の問題であるとして考

察していく。

それは次の梅田の文章からも明らかになろう。

私は三島君と石庭を訪ね、苔寺に詣り、都おどりに目を奪われるといった毎日をすごしたが、私は三島君がそれらの名所をまわりながら折々に洩らす感想を耳にするたびに、ギョッとするような、むしろ怖れに近い感情に駆られていた。（略）その旅から戻って書き上げた《五月の花》はそのとき三島君が何気なく洩らした感想をそっくりいただいて文中の綾としたもののように見える。つまり私はそれを書くことによって三島君の前に挫折してしまったということである。

三島と梅田の二人は世界文学社主催の講演会だけでなく京都観光もしており、そのときに三島が洩らした感想が梅田の作品に用いられたということだが、ここで記された〈都をどり〉は昭和二十三年には再開されていない。それどころか〈都をどり〉が再開されたのは昭和二十五年になってからのことである。その理由は『京都年鑑』[9]「昭和二十五年版」（昭二四・一一・二五、都新聞社）に次のように書かれているためである。

祇園の「都踊」を第一とするが、歌舞練場を吉本に貸した返還問題が解決せず、廿四年度開場を見るに至らず、事件は法廷にまで持ち出されるに及んだ。（略）舞踏は大阪の復興せぬ今日また先斗町の「鴨川踊」の独占する所となつた。

また『吉本八十年の歩み』に拠ると、日本が敗戦し、京都にも占領軍が滞在することになり「将兵のための娯楽施設提供を促す司令部指令があった」という。「娯楽施設とは単にキャバレー・ダンスホールであり映画館であ」ったが「京都府・市政庁は、市内に進駐して来る連合軍将兵の処遇に当惑していた」ようだ。そこで吉本興業は行政側から依頼を受けて、「度重なる談合により、その娯楽場を格式高い花街の殿堂、祇園甲部歌舞練場に決定した」のである。祇園甲部歌舞練場は「キャバレー・グランド京都」として使用され、「昭和二十七年一月二十九日一切の業務を停止し、三十一日約定に従い、祇園新地甲部貸座敷組合へ約束通り元の内装に戻し返還」されるまで占領軍のために接収されていたのである。[10]

このように確認していくと梅田が観光した内容を記憶違いしているように思われるが、決してそうではない。確かに〈都をどり〉は昭和二十五年まで再開されていないが、

昭和二十四年に「温習会」というかたちで踊りを披露している。それについては、「祇園甲部の温習会二日から十三日まで毎日午後二時から同歌舞練場でひらくが三十日午後一時からこれが大ざらえを行つた」（「京都新聞」第二面、昭二四・五・一）という記事がある。どうやら吉本興業との会場返還問題の未解決のため、〈都をどり〉としてではなく時期と規模を縮小して、温習会というかたちで歌舞練場を使用したようである。三島と梅田はこの「温習会」を観たのではないか。そうすると三島と梅田が京都にきた時期は昭和二十四年五月二日から十三日あたりではないかと推定される。そうすると舟橋が「花の素顔」執筆中であったことや三島の自伝小説のタイトルが「仮面の告白」と決まっていることも納得がいく。三島がこの京都での体験を基にして創作した「退屈な旅」は昭和二十四年十月に「小説別冊新潮」に掲載された。この「退屈な旅」では「五月の温気」が記されており、季節が五月であることが示される。そして登場人物の車崎夫人とその「若い燕」である勉はともに「温習会」を観に行くのだが、次のように記されている。

渡り廊下が紅白の幔幕で区切られてゐる。幕のむかうの結婚式場と、こちら側の「祇園甲部温習会々場」とを、これが遮断してゐるのである。（略）

二丁の柝が入つた。楽助と鳴吉の「千本の道行」の幕があくのである。――今年は先斗町の鴨川踊りに遠慮して、都踊りが小規模にこの会場で温習会の形で開催された。

このように「祇園甲部温習会」の会場が借りられたものであり、鴨川踊りの方が大々的に行われていた昭和二十四年五月上旬の京都のできごとをそのまま写し取っていると言えよう。次章ではその京都での体験から創作された、三島「親切な機械」「退屈な旅」と梅田「五月の花」との文章を比較したい。

四、「親切な機械」と「五月の花」

三島由紀夫「親切な機械」は昭和二十四年十一月に雑誌「風雪」に発表された作品である。この小説は昭和二十三年に起こった京大生による殺人事件を基にしたものであり、論者は既に論じたことがある。[11] この三島「親切な機械」は『決定版三島由紀夫全集』第十七巻（平一二・四・一〇、新

潮社）に「「親切な機械」創作ノート」（※以下「創作ノート」）が収録され、作品本文だけでなく「創作ノート」も含めて、梅田の体験と重なる表現が見られる。しかも「親切な機械」は「退屈な旅」と一ヶ月違いながら、同じく舞台が京都であり、人物設定は異なるが勉という登場人物が出てくる。

梅田は三島との京都滞在の記憶が小説に繋がったと回想していたが、その小説は「五月の花」（昭二五・七・一〇、京橋書院）であると考えられる。「五月の花」は梅田晴夫の妻であった石井喜美との関係を描いたものだと言われているが、その小説では三島との京都観光が「僕」と「燎子」との男女の関係性の中で用いられている。

まず「五月の花」は五章構成であり、初出は各章毎の計五回の発表である。第一章の「行装」は昭和二十三年十月に「群像」に掲載されたが、第二章の発表までは一年の間が空くことになる。第二章から第五章までは「三田文学」に昭和二十四年十月から昭和二十五年一月まで毎月連載されている。また第一章は舞台を「十国峠」と箱根周辺としているが、第二章以降は突如舞台が京都に移動する。その京都に移動してからの場面で三島作品と共通する箇所を見たい。登場人物の「僕」は「椹や」という柊屋を連想させる旅館で待つ「燎子」のために「リプトンという喫茶店でショート・ケーキを包ませ」て持ち帰る。

また「親切な機械」でも次のように同じ場所が描かれている。

その晩、木山は季子と寺町通のリプトンで待合せた。季子は点取虫の鉄子とちがつて折角入つた大学をないがしろにして、四条通の父親の店で売子をしてゐた。ナイロンのハンドバッグから綴錦のハンドバッグまでとりどりに並べた袋物の店である。六時に店を出て、鉄子の家へ行つて泊ると言ひ置いた。二人はちらちらと上目づかひに顔を見合せながら檸檬入りの紅茶を飲んだ。（第四章）

昭和二十四年当時、京都のリプトンティーショップは三条寺町の一店舗だけであり[12]、前章でも引用した梅田が三島と「新京極に出てショート・ケーキと紅茶の《はしご》をやった」という記事とも重なろう。さらに梅田は「三島君と石庭を訪ね、苔寺に詣」でたと述べているが、これも「五月の花」だけでなく「親切な機械」と共通する。

「五月の花」では竜安寺の石庭について、

本当は十五ある石がどこから見ても一つかくれて、十四しか見えないなどという関心の仕方は（略）俗っぽいと僕は考えるのであった。（中略）僕は「虎児渡」という言葉を意味もなく呟いていた。（第三章）

この表現については「親切な機械」や「退屈な旅」の本文中には確認できないが、三島の「創作ノート」には「大雲山竜安寺／（略）／伝相阿弥作石庭　虎の児渡。／石14」と「五月の花」と共通する内容が記されている。また「親切な機械」では猪口が鉄子に結婚を申し込む場所を、実際の事件の経緯と関係がない西芳寺、通称「苔寺」に設定しており、これも梅田の回想で訪れた場所と重なる。

また「親切な機械」で勉は友人達とアナーキズムの雑誌を出版する計画をしており、その友人の香取が資金を得るために「麩屋町通の欧洲文学社」を訪ねる場面がある。梅田と三島に講演を依頼した世界文学社は、昭和二十四年当時「京都市下京区麩屋町通四条下ル」[13]にあり場所も重なる。

このように三島と梅田の京都での体験は、両者の小説の中で活かされていると言えよう。また梅田が「三島君が何気なく洩らした感想をそっくりいただいて文中の綾としたもののように見える。つまり私はそれを書くことによって三島君の前に挫折してしまったということである。」と述べていることは謙遜だとは思われるが、この後には小説を数篇著しているだけであり、小説家としての在りように思うところがあったのかも知れない。

ここまで見てきたように「年譜」の基になった記事や当時の京都の情報を集めることで、「年譜」の修正や小説生成の背景が明らかになることもある。三島の昭和二十年代の年譜作成にはいまだ多くの検討の余地があると言えよう。

例えば次のような記事は「年譜」から抜け落ちている。昭和二十四年七月号の「世界文学」「編集後記」（無署名）には、

去る六月二十五日、東京明大講堂において本社主催文芸講演会を開いた。講師はM・ロベール、伊吹武彦、赤岩栄、岡本太郎、三島由紀夫の諸氏。

とあり三島の名前が確認できる。

この文章に関連する資料として、昭和二十四年六月二十六日付の椹一雄宛書簡に、

昨土曜日、明大での講演会に一時間も遅刻いたしまして、（略）あわてゝとび出して明大へ駈け付けました。

とある。この書簡は、三島が檀一雄と初めて顔を合わせたが、三島は講演会に遅刻しており急いでいたために挨拶が出来なかった非礼を詫びる書簡である。時間に几帳面な三島が遅刻していることも興味深いが、特に注目したいのは、時期と場所である。昭和二十四年六月二十五日は土曜日であり、場所も「明大」であることから、三島は東京での世界文学社の講演会に出ていたことを裏づけることができる。この時期の世界文学社は次第に経営が傾いてきており、東京進出を考えていた。そこでも三島は講演会に参加していたのである。この時期の三島と世界文学社のつながりは深かったと言えよう。

注

（1）三島由紀夫文学館において平成二十六年七月一日から同年十一月三十日まで催された企画展「戦時下の三島由紀夫―学習院高等科時代―」で展示された。

（2）三島由紀夫『仮面の告白』は発表当初ほとんど批評されることはなかったが、昭和二十四年十二月二十六日の「読売新聞」で今年の小説ベスト・スリーに選ばれるとともに、昭和二十五年以降「仮面の告白」への評論が増えている。

（3）三島の「煙草」が掲載された経緯は、木村徳三『文芸編集者その覚音』（昭五七・六・二一、TBSブリタニカ）に詳しい。

（4）金関寿夫「四条麩屋町下ル34――三島由紀夫のニセ者が現れた話②――」（「図書新聞」第四面、昭五四・三・二四）。また金関寿夫「四条麩屋町下ル19――さまざまな横顔　その四――」（「図書新聞」第三面、昭五三・八・一九）で、当時世界文学社の編輯をしていた金関寿夫が昭和二十二年に川端に「世界文学」への執筆を依頼したことを記している。しかし川端は「世界文学」には、小説・評論などを書いていない。おそらくその代わりとして、三島と梅田が世界文学社と関わることになったのではないか。

（5）ただし雑誌の終盤になると経営状態が悪化したようであり、第三十五号が昭和二十四年八月に発行されるまでほぼ毎月発行を守っていたが、次の第三十六号は四ヶ月空いて、昭和二十五年一月に発行された。第三十六号の「編集後記」にも休刊の理由について「一言で言えば経営難である。」と記されている。

（6）金関寿夫「四条麩屋町下ル14――サルトル事始　その二――」（「図書新聞」第三面、昭五三・八・一九）

（7）『決定版三島由紀夫全集』第一巻（平一二・二・一〇、新潮社）の「解題」で「仮面の告白」と関連性があると考えられる「昭和二十一年ノート」が紹介された。また拙稿

「三島由紀夫「サーカス」成立考――執筆時期と改稿原因をめぐって――」（「昭和文学研究」57、平二〇・九）でも指摘した。

（8）昭和二十三年十一月二日付の坂本一亀宛書簡で、自伝的小説のタイトルを「仮面の告白」にしたことが書かれている。

（9）『京都年鑑』は「昭和二十五年版」とあるが昭和二十四年の京都のできごとがまとめられている。

（10）『吉本八十年の歩み』第十二章：付帯事業（一〇七～一〇八頁、平四・八・一、吉本興業株式会社）

（11）拙稿「三島由紀夫「親切な機械」の生成――三島由紀夫とニーチェ哲学――」（「日本近代文学」84、平二三・五）

（12）現在ティーハウスリプトンを経営している、株式会社フクナガの広報担当、武藤博氏にお教え頂いた。

（13）「奥付」（「世界文学」32、昭二四・五）に拠る。

（本学特任講師）